

国立国語研究所学術情報リポジトリ

On the proper treatment of experiencer verbs in Japanese

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 三原, 健一, MIHARA, Ken-ichi メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002043

日本語心理動詞の適切な扱いに向けて

三原 健一

(大阪外国語大学)

キーワード

ES型心理動詞, 活動動詞, 自動詞と他動詞, アスペクチュアリティ

要旨

長い研究史の中で、日本語動詞の文法的振る舞いがかかなり明らかにされてきたのに対し、心理動詞は最も解明が遅れている動詞類の一つである。動詞の体系的分類における位置付けを初めとして、自動詞・他動詞の区分さえ十分に認識されているとは言い難い。そのような状況を幾分かでも改善するために、本稿では、日本語のES型心理動詞が活動動詞であること、そして自動詞・他動詞が明確に峻別されることを論じる。ひとことで言えば、日本語のES型心理動詞が、動詞の体系的分類の中で他の動詞類と同様の地位を有することを示すのが本稿の主論点である。

1. はじめに

心理動詞構文¹とは、何らかの感情を抱く人(「経験者」と)、その感情を引き起こす原因(「対象」)を含む構文である。この構文に(1a, b)の二区分があることはよく知られている。(1a)は経験者「この子」が主語に立つ類型であり、(1b)は経験者が目的語となる類型である。他方、対象「雷」は、(1a)では目的語位置に、(1b)では主語位置にくる。以下、(1a)タイプを「ES (experiencer-subject) 型」、(1b)タイプを「EO (experiencer-object) 型」と呼ぶ。

- (1) a. この子が雷を怖がる。
b. 雷がこの子を怖がらせる。

心理動詞の研究は、生成文法の枠組みを取る Postal(1971)による英語心理動詞の分析に端を発し(Lakoff 1970にも若干の分析がある)、現在に至るまで夥しい数の論考が刊行されている。他方、日本語心理動詞については Akatsuka McCawley(1976)に詳しい分析が見られるものの、包括的な研究は、英語に比して量的に極めて少ないのが現状である²。また、日本語、その他の言語を問わず、研究者の興味を引いてきたのはEO型であるが、それは、EO型が示す(とされる)幾つかの「特異な」言語現象の故である³。ES型については、現在でも影響力の大きい Belletti and Rizzi(1988)や Grimshaw(1990)を初めとして、大方の研究者が、通常他動詞構文として済ませてきたように思う。そして日本語においては特に、EO型が示す(2)の逆行束縛現象に研究者の興味が偏する傾向が見られ、ES型について十分な考察が行われてきたとは決して言えない。

- (2) a. [花子が自分_iを嫌っていること]が太郎_iを苦しめた。
b. [花子がお互い_iの秘密を暴露しようとしていること]が彼ら_iを悩ませた。

本稿では、そのような状況に鑑み、主として記述的な観点からES型心理動詞の構文的な特質、

特に、どのような動詞類型に属するのかということをも明らかにし、今後の研究に対する一助としたい。

2. 活動動詞としての分類

2.1. 心理的活動動詞

ES型心理動詞が動作動詞なのか、それとも状態動詞なのかという点に関して、英語においても研究者の意見が一致している訳ではない。例えば Grimshaw(1990)は、EO型の frighten が進行形を許す(従って動作動詞である)のに対して、ES型の典型とされる fear が進行形を作らないことなどから、ES型は状態動詞であるとしている。

(3) a. The storm was frightening us.

b. *We were fearing the storm. (Grimshaw 1990: 23)

しかし、Van Voorst (1992)は、(4)の例を挙げると同時に、ES型が程度副詞を取ることや受動形になることを指摘し、この類型は状態動詞ではないと説得的に論じている⁴。

(4) a. These gourmets are adoring the wine at today's banquet.

b. They are admiring the beautiful Van Gogh. (Van Voorst 1992: 76)

では、日本語についてはどうなのだろうか。動作動詞か状態動詞かに関して明示的に論じた研究を寡聞にして知らないが、心の中の感情を表わす動詞であるからか、深い考察を経ずに状態動詞であるとされてきたようにも思う。本稿では以下、日本語のES型心理動詞は、動作動詞、特に Vendler(1967)分類における活動動詞(activity verb)であり、その他の類型ではないことを示したい⁵。この言明は、活動動詞には、「走る」「殴る」といった物理的活動動詞のみならず、心的活動を表わす心理的活動動詞があることを積極的に主張するものでもある。

以下、(5)に示す四分類(Vendler 1967)のうち、例えば2.2節と2.3節の根拠により状態動詞性を否定するといったように、順次、活動動詞としての特性を浮き彫りにしたい。

(5) a. 状態動詞(state)

b. 活動動詞(activity)

c. 到達動詞(achievement)

d. 達成動詞(accomplishment)

初めに日本語のES型心理動詞の例を掲げておこう。((6a,b)の区分については第3章で述べる。)

(6) a. 怖がる, 喜ぶ, 恐れる, 恨む, ねたむ, 侮る, そねむ, ひがむ, 諦める, 楽しむ, 心配する, 悲しむ, 呆れる, 飽きる, 同情する, 感心する ...

b. 悩む, 困る, 驚く, 弱る, 焦る, 苦しむ, おびえる, まいる, 滅入る, まごつく, 戸惑う, 白ける, ひるむ, めげる, 懲りる, 失望する, 落胆する ...

ES型心理動詞としては、他にも、「イライラする」「ウキウキする」などの擬態語タイプ、「頭にくる」「腹が立つ」などの成句タイプもあるが、本稿の目的にとってはとりあえず(6)の例で十分であろう。(詳細な分類については吉永1997, 山岡1998が詳しい。)

2.2. 未完了的特質

日本語のES型心理動詞は、生産的に「テイル」形を作ることが出来るという点において、fear/loveなど進行形を許容しない動詞類を含む英語の場合とは異なっている。

(7) 怖がっている、呆れている、喜んでいる、悩んでいる、困っている、苦しんでいる…
(7)の特質が状態動詞性と相容れないことは明白である。状態動詞には「テイル」形がないからである。

- (8) a. 犬が {いる/*いている}。
b. ベンチが {ある/*あっている}。
c. 英語が {出来る/*出来ている}。

英語の状態表現において、John is being very kindのように進行形を用いることは可能であるが、この場合、「普段は親切ではないのに、今だけ親切なフリをしている」といった臨時性の意味が加わる。(これは、状態表現を、臨時に動作表現として用いているものと言える。)(7)の「テイル」形には、「学生は山田先生を怖がっている」のように、臨時性の意味がないことに注意されたい。

次の問題は、(7)の「テイル」形が、動作持続・結果持続のいずれであるかということである⁶。これはすなわち、(7)の動詞が動作動詞なのか、それとも結果動詞(本稿での到達動詞に相当する)なのかという問いとほぼ同義である。「壊れる」「届く」などの結果(到達)動詞は、それぞれ物理的状态変化・物理的位置変化を表わし、このタイプの動詞は必然的に完了的(telic)なものとなる。ところが(7)の動詞は、物理的状态変化を示すとは言えず、もちろん位置変化とも無関係である。

また、(7)の動詞は、その心理的動作が終了時点を持たないという点で、未完了的(atelic)動詞である。終了時点の有無は、動作の終了に要する時間を表わす、「～{分/時間/日/年}で」との共起で調べることが出来る。結果(到達)動詞は、(9a,b)のようにこれらの表現を従え得るが、(9c,d)で見ると心理動詞ではこれが不可能である。((9c,d)は、文脈を整えれば、動作が開始するまでの時間を表わす「開始読み」で正文になる場合もあるが、「終了読み」では非文であることに注意。)

- (9) a. コンピューターが {3週間で/2ヶ月で} 壊れた。
b. 小包が {3時間で/2日で} 届いた。
c. *国民が大統領の死を {3時間で/2日で} 悲しんだ。
d. *農民が日照りに {3ヶ月で/2年で} 苦しんだ。

以上のことより、ES型心理動詞が、少なくとも結果(到達)動詞ではないことが明らかになった。

ところで、活動動詞と達成動詞は、「走っている」「(ケーキを)作っている」が共に動作持続になることから分かるように、動作動詞の下位類を構成する。ではES型心理動詞はいずれの下位類に属するのだろうか。数量詞連結(遊離)構文でこのことを調べてみよう。

この構文は、名詞句の数を示す数量詞が、(10)の「2人」「2冊」のように、その名詞句から離れた場所に生起する構文である。

- (10) a. 留学生が、昨日、2人弁論大会に参加した。
b. 私は英語の辞書を生協で2冊買った。

この構文は、(11) の到達動詞や (12) の達成動詞のような、明確な終了時点を有する動詞では問題なく成立するが、(13) の活動動詞のような、終了を明示しない動詞では落ち着きが悪くなる。つまり、数量詞連結構文は、完了・未完了という、アスペクト性制約に規制された構文であると言える(三原1998)⁷。

- (11) a. 桜の木が虫害で5本枯れた。
- b. 小包が留守にしている間に2つ届いた。
- (12) a. 子供がおもちゃをもう2つ壊した。
- b. 僕は書類を午前中に3つ仕上げた。
- (13) a. ?僕は友人を駅前で2人待った。
- b. ?私はいたずら坊主を公園で5人怒鳴った。

そして重要なことに、心理動詞ではこの構文が全く成立しないのである。

- (14) a. *うちの子は能面を昼間でも3つ怖がった。
- b. *彼は同僚を心底2人憎んだ。

以上の観察を総合すると、ES型心理動詞は未完了的動詞であり、到達動詞や達成動詞とは別の類型に属することが明らかである。また、未完了的ではあっても、状態動詞でないことは当節の冒頭で示した通りなので、残る類型は活動動詞のみということになる。

2.3. 「ル」形が示す未来事態

日本語動詞の「ル」形は、(15a,b)のように動作動詞では未来の事態を表わすが、状態動詞では、(16a)のように時副詞「明日」などを用いて未来の事態であることを強制しない限り、(16b,c)のごとく現在の事態を表わすのが無標である。(習慣的動作などは考察から省く。)

- (15) a. 太郎が大阪に来る。
- b. 花子がショパンを演奏する。
- (16) a. 僕は明日は家にいる。
- b. 太郎が図書館にいる。
- c. 本棚に聖書がある。

このように、「ル」形が表わす事態が未来・現在のいずれであるかということは、動作動詞・状態動詞を峻別する基準になり得る。

そして、心理動詞の場合、(17)のように「ル」形が未来の事態を示し、現在の事態を表わすためには「テイル」形を用いなければならない。

- (17) a. 僕はもう諦めるよ。(諦めている)
- b. 親が悲しむぞ。(悲しんでいる)
- c. そんなことをすると、子供が怖がるでしょ！(怖がっている)
- d. 心配するよ、おじいちゃんが。(心配している)
- e. この味では客が飽きる。(飽きている)

これは、言うまでもなく動作動詞の特徴であり、状態動詞性とは相容れない。ただ、「子供が犬小

屋を作る」のように、例えば達成動詞（動作動詞の下位類）の「ル」形も未来の事態を表わすので、(17) が示しているのは、心理動詞が状態動詞ではないという一点のみである。

ところで、心理動詞の「ル」形では次のような文も可能である。

- (18) a. そんなこと、困るよ。
b. あいつの喋り方はイライラする。
c. この喫茶店は落ち着く。
d. うーん、その選択は迷うなあ。
e. あいつの駄洒落は白ける。

(18) で描写されているのは、明らかに現在の事態であり、上で述べた結論に反する。ここでは一体何が起こっているのだろうか。この問題は第3章で取り上げ、本稿の主張の反例にはならないことを論じる。

当節では、2.2 節の結論を補強する形で、ES 型心理動詞が状態動詞ではないことを述べた。

2.4. 未完了の逆説

未完了の逆説 (imperfective paradox) とは次のような現象である。「歩く」「叱る」などの活動動詞は、必然的な終了限界を有さないという点で、典型的な未完了的動詞である。ところが、これを動作持続の「テイル」形にすると、(19) のように、事態が既に成立したことを意味するようになる。つまり、「歩いた」「叱った」が示す、完了的事態が含意されるということである。他方、「作る」「描く」などの達成動詞は、それら自体は完了的動詞であるのに、(20) の「テイル」形では、事態が進行していることを示すだけで完了の含意はない。英語の進行形でも、(21) のように日本語と全く同じ現象が起こる⁸。

- (19) a. 赤ちゃんが歩いている。(→ 赤ちゃんが歩いた)
b. 母親が子供を叱っている。(→ 子供を叱った)
(20) a. 山本さんが納屋を作っている。(×→ 納屋を作った)
b. 菜穂子が油絵を描いている。(×→ 油絵を描いた)
(21) a. Look! A baby is walking. (→ A baby has walked)
b. Mary is drawing a picture. (×→ Mary has drawn a picture)

なお、「枯れている」「来ている」など到達動詞の「テイル」形は、結果持続なので、当然のことながら「枯れる」「来る」という事態は既に完了しているのだが、未完了の逆説と呼ばれる現象は、あくまでも動作持続の「テイル」（及び英語の進行形）について言われることに注意されたい。

さて、心理動詞はどうであろうか。既に読者も予測されていることと思うが、この動詞類は活動動詞と同じ振る舞いを見せるのである。

- (22) a. 村田さんは大家を恨んでいる。(→ 大家を恨んだ)
b. 孝志は弟の才能を妬んでいる。(→ 才能を妬んだ)
c. 被災者が食料不足に苦しんでいる。(→ 被災者が苦しんだ)
d. 美穂は結婚問題で悩んでいる。(→ 美穂が悩んだ)

この事実から、心理動詞が達成動詞の類型には属さないことが分かる。2.2節における結論（心理動詞が終了限界を持たないこと）は、当節での結論と完全に響き合うものである。

2.2節から2.4節までの議論を統合すると、日本語のES型心理動詞が Vendler (1967) 分類における活動動詞であることは、十二分に証明されたと言えるであろう。ES型心理動詞は、その他のアスペクチュアルな観点からも活動動詞と全同の振る舞いを示すのだが、このことは第4章で詳細に論じる。そしてその際に、この動詞類型が終了限界を有さないことを、別の現象を見ることで確たるものにしたい。つまり、到達動詞や達成動詞の可能性は全くないということである。

3. 自動詞と他動詞

3.1. 自他の認定基準

ある動詞が自動詞・他動詞のいずれに属するかは、様々な文法現象の根幹に関わる問題であるので、日本語のみならず、その他の言語においても繰り返し論じられてきた。ところが奇妙なことに、心理動詞については、文献の数が極めて少ない日本語では予測される通り、そして英語やその他の言語においても、十分に論じられてきたとは決して言えない。本章の主論点は、日本語のES型心理動詞にも、明確なパラダイムを構成する自動詞・他動詞の別があることを示すことであるが、この問題を論じるにあたっては、慎重に煉瓦を積み重ねるような作業が必要になる。

他動詞であることを認定する第一の基準は、「ヲ」で標示される目的語を有するか否かである。例えば、「(薪を) 割る」「(生徒を) 誉める」などが他動詞と認定されるように。が、この基準だけでは、(23a) のような「ヲ」格句を含まない文は自動詞ということになる。また、(23b) での経路の「ヲ」格句「土手の上を」や、(23c) での状況の「ヲ」格句「吹雪の中を」を、目的語とすかどうかという問題も生じてくる。

- (23) a. 学生たちは大学当局に抗議した。
- b. のび太は土手の上を走った。
- c. 山岳パーティは吹雪の中をさまよった。

「ニ」格句を取る動詞の中にも他動詞的なものがあることは、例えば杉本(1991)が詳細に論じている。次のようなものである。

- (24) a. 奥さんは山田さんに寄り添っている。
- b. 次郎は父親に反抗した。(杉本1991: 233-234)

杉本は、これらの動詞は「ヲ」格句を取らないので自動詞と考えられるが、(25)の直接受動文が可能であることから、「他動詞に準じた動詞」(p.238)とし、準他動詞と呼んでいる。

- (25) a. 山田さんは奥さんに寄り添われている。
- b. 父親は次郎に反抗された。(同上)

しかし以下で述べるように、直接受動文が成立することは自他認定の重要な根拠になると考えられるので、(24)の動詞は他動詞として差し支えないであろう。このタイプの動詞には、「そむく」「逆らう」「追いつく」「取って代わる」など多数あるが (p.235)、このリストの中に「惚れる」「飽きる」などのES型心理動詞が含まれていることは、本稿の主張にとって極めて重要である。

他方、経路の「ヲ」格句については多少複雑である。経路の「ヲ」格句（及び状況の「ヲ」格句も）は、目的語ではなく、ある種の副詞句であるとするのが一般的な見解であり、それは直感的には納得出来ることである。が、野村(1982=1995,頁数は再録版による)は、(26)の直接受動文の例を挙げ、経路の「ヲ」格句を伴う動詞を他動詞としている。また、(27)などを可能とする話者もある。

(26) a. やはり双六小屋の荷上げ道の一部として利用されていた打込谷もようやく沢通しに歩かれるようになり、抜戸岳の登路にされつつある。

b. ... すでに1930年代から幾多の大岩壁が登られていたが ... 1934年にはアイガー東山稜がルイジ・カレル一行によって登られている。(野村1982=1995: 145)

(27) a. 日本の領海が無許可の外国船に航行されている事実を知っていますか。

b. 熊野旧街道は、最近のアウトドア・ブームで、ハイカーたちによく歩かれているようだ。

しかしながら、(28)のような例が容認されないことも、また事実である。

(28) a. *空は飛行船に飛ばれている。

b. *裏道は山田さんに歩かれている。(杉本1986: 295)

このような文法性の揺れの原因については俄かには分からないが、(26)(27)の例はいずれも受動文主語の特徴付けを表わすもので、動作性(eventive)の(28)などとはタイプが異なるようにも思う。日本語に形容詞的受動文(adjectival passive)が存在するかどうか、議論を要する問題であるが(益岡1991(補説1)参照)、もし存在するとすればそのようなタイプではないだろうか。他方、状況の「ヲ」格句については、直接受動文の主語とするのは、まず無理であろう(杉本1986に詳しい議論がある)。

さて上の先行研究においては、直接受動文の可否が自他認定の重要な基準とされていた。この見解は、実は、三上(1953=1972)にまで溯ることが出来る。三上は、いわゆる能動詞と所動詞の区分を論じた文脈(pp.98-112)の中で、能動詞のうちまともな受身(直接受動文)が成立するものを他動詞とした。そして、この基準を援用すると、(29a)のような「ニ」格句を取る動詞でも、まともな受身が可能ならばそれを他動詞とすることが出来ると述べている。

(29) a. 犬が僕に{吠える/飛びつく}。

b. 僕が犬に{吠えられる/飛びつかれる}。

上で引用した野村(1982=1995)は、三上の見解を踏襲し、直接受動文の可否を自他分類の重要な基準としたのであった。

では、「ヲ」格目的語を有するか否かという基準と、直接受動文の可否という基準の他に、自他認定の基準はあるのだろうか。この点に関して、周到な議論を展開している杉本(1986)の方法を概観し、そのうちどれがES型心理動詞の検証に援用出来るか考えてみよう。

杉本(1986: 281-296)は、経路の「ヲ」格句・状況の「ヲ」格句(杉本の用語では、それぞれ「移動補語」「状況補語」)に対して、6つの統語的テストを適用することによって、目的語性の有無を調べようとする。紙幅の関係もあり、経路の「ヲ」格句についてのみ見ることにしよう。

- (30) a. 二重対格制約 (*生徒を英単語を覚えさせる/次郎を無理矢理門を通す)
 b. 「ヲ」格句からの数量詞遊離 (鉛筆を5本買う/川を3つ渡る)
 c. 状態性述語の目的語「ガ」標示 (この本 {を/が} 読みたい/空 {を/が} 飛べたらいいなあ)
 d. 「ノ」の前での「ヲ」の脱落 (*韓国語をの勉強/*公園をの散策)
 e. 直接受動文の可否 (花子は先生に殴られた/この山道は多くの人に歩かれている~*裏道は山田さんに歩かれている)
 f. 連体修飾節中での代用形 (*僕の先生が去年それを書いた本/学校に通う時そこを通る道)

まず、ES型心理動詞は移動動詞ではないので、そもそも経路の「ヲ」格句を取ることがなく¹⁰ (また、状況の「ヲ」格句も極めて取り難いであろう)、二重対格制約のテスト (30a) は適用出来ない。次に、(30b) の数量詞連結 (遊離) であるが、2.2 節で既に述べたように、この構文の成立は動詞のアスペクト性に大きく依存しており、完全に未完了的な心理動詞では、「ヲ」格句が目的語であるか否かとは別の次元で連結 (遊離) 現象が起こらない。従って、このテストも無関係とせざるを得ない。また、繰り返し述べてきたように ES 型心理動詞は状態動詞ではないので、目的語「ガ」標示のテスト (30c) も援用出来ない。(30d) の「ヲ」の脱落については、「ヲ」格句が目的語であるかどうかということよりも、むしろ表層の格形式に依存した現象であろう。あと代用形の問題 (30f) は、杉本自身認めているように、目的語性認定の強い根拠にはならないようである。とすると、心理動詞の自他認定に関して有効なテストとなる可能性があるのは、やはり (30e) の直接受動文であるということになる。

さて、以上のことより、ES 型心理動詞の自他認定基準として次のものを設定する。③は、本稿で新たに提案する統語的基準で、項・付加詞の峻別に関わるものであるが、これについては後に詳しく述べる。

- ① 「ヲ」格句を伴う心理動詞は他動詞とする。(これらは全て直接受動文が可能。)
 ② 「ニ」格句を伴う心理動詞は、直接受動文が可能ならば他動詞、不可能ならば自動詞とする。
 ③ 長距離かき混ぜ操作によって島から要素を抽出した場合、弱い非容認性を示すならばその心理動詞を他動詞、強い非容認性を示すならばその心理動詞を自動詞とする。

3.2. 格の対応と直接受動文

「ヲ」格句を伴う ES 型心理動詞には次のようなものがある。

- (31) 怖がる, 喜ぶ (「ニ」も可能), 恐れる, 恨む, 好く, 嫌う, ねたむ, 侮る, そねむ, ひがむ, 諦める, 楽しむ, 心配する, 悲しむ ...

これらは、問題なく直接受動文が成立するので、他動詞と認定してよいであろう。(もっとも、(32d) のように、文章体の方が落ち着きのよい例もある。)

- (32) a. 田中先生は学生に怖がられている。
 b. あいつはみんなに恨まれている。
 c. 僕はガールフレンドに嫌われてしまった。

- d. 大統領の死が全国民によって悲しまれた。
- e. そのお土産は同僚に喜ばれた。

ただ、「喜ぶ」は注意を要する。この動詞は、「NPを喜ぶ」「NPに喜ぶ」のように「NPヲ/NPニ」の双方を取り得るが、どちらを取るかによってNPの性質が異なるように思える。(33)を観察してみよう。

- (33) a. 子供たちはお父さんの思わぬお土産 {を/に} 喜んだ。
- b. 遭難者の家族はみんなその知らせ {?を/に} 喜んだ。

(33a) では「ヲ/ニ」の双方が可能だが、それに応じて「お土産」の解釈が異なる。お土産を対象としてそのお土産自体を喜ぶという対象解釈（「ヲ」の場合）と、そのお土産を原因として他のこと（「普段は冷たいお父さんが、本当は子供たちのことを考えている」など）を喜ぶという原因解釈（「ニ」の場合）である。もちろん、原因解釈の場合でも、「その結果として」お土産自体を喜ぶという、語用論的解釈は排除されないのであるが。それに対して、筆者の判断では(33b)における「ヲ」が微妙に悪い。これは、「知らせ」の場合、その知らせの内容（遭難者の無事など）を喜ぶのであって、その知らせ自体を喜ぶのではないことによると思われる。（ここにおいて再び、語用論的推論が働く余地はあるが。）そしてさらに重要な点は、(34a)の直接受動文では「お土産」の対象解釈のみが浮上すること、そして(34b)が不自然に響くことである。

- (34) a. そのお土産は子供たちに喜ばれた。
- b. ?その知らせは遭難者の家族に喜ばれた。

以上のことは、「ヲ」が選択される場合と「ニ」が選ばれる場合とで、NPの項性が異なることを示していると思われる。対象解釈の場合、「お土産」は項(argument)(直接目的語)であり、他方、原因解釈の場合、「お土産」は付加詞(adjunct)であると考えられる。このことはすなわち、後の議論を先取りして言えば、「喜ぶ」には、他動詞（「NPを喜ぶ」）と自動詞（「NPに喜ぶ」）の別があることを示しているのである¹¹。

次に、「ニ」格句を伴うES型心理動詞には(35)のようなものがある。

- (35) a. 呆れる, 飽きる, 同情する, 惚れる, 感心する ...
- b. 悩む, 困る, 弱る, 苦しむ, おびえる, まいる, 滅入る, まごつく, 戸惑う, 白ける, ひるむ, めげる, 懲りる, 感動する, 失望する, 落胆する ...

ここで、(35a)は直接受動文が可能なので他動詞、(35b)は不可能なので自動詞と認定する。

- (36) a. 明美の服装はみんなに呆れられた。
- b. テレビの馬鹿番組はもう飽きられている。
- c. なんか、ひどく同情されちゃってさ、オレ。
- (37) a. *長男の非行が両親に悩まれている。
- b. *長期に亘る日照りは農民に苦しまれた。
- c. *ヒロシの言動はみんなに困られている。

ただ、多少問題になる動詞もあるので、それらを順次見ていきたい。

(a)「驚く」。「その知らせはみんなに驚かれた」が言えるとする話者も多く（ただし筆者には不自

然), その話者にとっては他動詞として意識されているようである。

- (b) 「焦る」。「功を焦る」などは言えるが、「ヲ」格に立つ NP が狭く限定されており、また「*功が焦られる」は不可である。「功を焦る」は成句として扱った方がよいであろう。「太郎はライバルの出現に焦った」など一般的な表現では、「*ライバルの出現が太郎によって焦られた」はもちろん不可である。
- (c) 「ためらう」。「資料公開をためらう」のように、「ヲ」格句を従え得るという点では他動詞的だが、「資料公開がためられる」は受身ではなく自発であろう。
- (d) 「悔やむ」。これも、「宣伝不足を悔やむ」が言えるという点では他動詞的だが、「宣伝不足が悔やまれる」はやはり自発である。
- (e) 「後悔する」。「不用意な発言を後悔する」は正文だが、「*不用意な発言が首相によって後悔された」は無理である。
- (a) (b) は、「～ {に/*を} 驚く」「～ {に/*を} 焦る」(「功を焦る」以外の場合) というパターンを取り、かつ、直接受動文が成立しないので自動詞と認定すべきだろう。(c) (d) (e) については最終的な結論は保留としたいが、次節で論じる、島からの摘出では他動詞と類似する振る舞いを見せる。

さて、既にお気付きのことと思うが、2.1 節で見た (6a) と (6b) の区分は、それぞれ他動詞・自動詞の別に対応しているのである。次節では、当節の結論を、島からの摘出可能性によって補強することにしよう。

3.3. 島からの摘出

日本語では、長距離かき混ぜ操作 (long distance scrambling) によって、従属節中の要素を主節頭に移動することが可能である。(移動した要素の痕跡を「e」で表示する。)

(38) 修論を、太郎は [花子がもう e 提出したかどうか] 次郎に聞いた。

このような要素の摘出は常に可能である訳ではなく、従属節が島 (island) と呼ばれる構造をなしている時、その島の強弱によって摘出の困難性に差が生じる。(ちなみに、(38) の「カドウカ」節は島ではない。)(39) の、「噂」を主名詞とする同格節 (外の関係の連体修飾節) は弱い島を構成し、その節中から、目的語項「田中を」を摘出すると弱い非容認性を示す。一方、付加詞「青森で」を摘出すると、目的語の場合より強い非容認性を示すようになる。(このような摘出については話者によって判断が揺れる。各話者の文法性判断に応じて、以下、文例の非容認性を一段階ずつ増減させてもかまわない。)

(39) a. ?田中を、太郎は [花子が青森で e 殺したという噂] を聞いた。

b. ??青森で、太郎は [花子が e 田中を殺したという噂] を聞いた。

さて、ES 型心理動詞において、(40) と (41) では容認性の差があるように感じられる。

(40) a. ?主任教授を、私は [学生たちが e 怖がっているという噂] を聞いた。

b. ?そのような曲調に、私は [音楽ファンが e 飽きているという感触] を持っている。

(41) a. ??今回のリストラ計画に、私は [係長が e 悩んでいるという噂] を聞いた。

b. ??首相の発言に、私は [関係者が e 戸惑っているという感触] を持っている。
関係節のような強い島にすると、この差はさらに際立ってくる。

(42) a. ??主任教授を、私は [学生たちが e 怖がっている学科] を調査した。

b. ??そのような曲調に、私は [音楽ファンが e 飽きている理由] がよく分かる。

(43) a. *今回のリストラ計画に、私は [係長が e 悩んでいる部署] を再編成しようと思う。

b. *首相の発言に、私は [関係者が e 戸惑っている今度の国会] を興味深く見守っている。

(40) の「怖がる」「飽きる」と (41) の「悩む」「戸惑う」は、3.2 節で、それぞれ他動詞・自動詞と分類した動詞である。従って、かき混ぜ操作によって主節頭に抽出した要素は、他動詞の (40) では、それが「ヲ」格を取るか「ニ」格を取るかにかかわらず項である。他方、自動詞の (41) では文頭要素は付加詞である。(40) (41) での項・付加詞の区分、及び文法性の差が、それぞれ (39a) (39b) のそれに対応しているのである。

3.2 節の最後で述べた、問題になる動詞に対して上のテストを適用してみると、興味深いことに次の構図が浮かび上がってくる。

(44) a. ?宣伝不足を、私は [市当局が e 大いに悔やんだという報告] を受けた。

b. ?不用意な発言を、私は [首相が e 後悔したという話] を聞いた。

c. ?資料公開を、私は [大学側が e ためらっているという印象] を受けた。

(45) a. ??内田氏の脱会に、私は [関係者が e 驚いたという話] を聞いた。

b. ??美穂の縁談の話に、私は [山田君が e 焦っているという印象] を受けた。

つまり、とりあえず自動詞としておいた (45) が (41) と同様の様相を呈するのに対して、「ヲ」格句を伴うという点で他動詞的な (44) が、(40) に類する振る舞いを見せるのである。

当節で見た現象は、前節での結論と併置してみる時、少なからぬ重みを有することが理解されよう。

3.4. 心理動詞構文における「ニ」と「デ」

当節と次節では、ES 型心理動詞の自他区分と密接な関係がある、二つの現象を見ることにする。まず、(46) の「日照りに」と「日照りで」は、共に原因を表わすとされるだけで、その違いについて十分に議論されてきたとは思えない。(ただ、Bando 1997, 1998 に本稿とは別の観点からの分析がある。)

(46) 日照り {に/で} 苦しんだ。

しかし、「ニ」句と「デ」句は、(47) のようにその双方が現れることも可能である。

(47) 長期に亘る日照りで、作物の不作に苦しんだ。

ここにおいて、「苦しむ」の直接的原因となっているのは「作物の不作」であり、「長期に亘る日照り」は「作物の不作」を引き起こした原因である。すなわち、「長期に亘る日照り」は、「苦しむ」に対しては間接的原因として機能していることが分かる。

また、(48) では「ニ」「デ」双方が許容されるのに対して、(49) では「デ」が許されないとい

う現象がある。

- (48) a. 友人の突然の死 {に/で} 驚く。
b. 進路の選択 {に/で} 悩む。
c. 不規則発言 {に/で} まいる。
d. ポリーニの演奏 {に/で} 感動する。
- (49) a. 雷 {を/*で} 恐れる。
b. 担任教師 {を/*で} 憎む。
c. あいつの言動 {に/*で} 呆れる。
d. コンサート {に/*で} 飽きる。

ここで直ちに気付かれることは、(48) が自動詞であるのに対して、(49) が他動詞であることである。では、自動詞・他動詞でなぜこのような差が生じるのだろうか。

(49) で、「雷(を)」「コンサート(に)」その他は、「恐れる」「飽きる」などの感情を抱かせる直接的原因となっているが、他動詞であるので、当然のことながらこれらは必須項である。つまり他動詞では、これら直接原因句を「ヲ」または「ニ」で標示せざるを得ないのである。それに対して、自動詞文では「ニ」句・「デ」句が付加詞であるので、どちらも使用することが出来る。(47) で見たように、「両親の不仲で結婚式の日取りに悩む」と両者を併置することも何ら問題ない。(なお、誤解が生じないうちに付記しておきたいが、他動詞文においても間接的原因が関与することはあり得るので、「見舞いに来てくれたことで太郎に感謝する」のように、間接的原因を「デ」句で表わすことは排除されない。)

3.5. 「ル」形が示す現在の事態

心理動詞では「ル」形が未来の事態を表わし、これは動作動詞の特徴であることを2.3節で述べた。しかしながら、「ル」形が現在の事態を示す場合があることも指摘した。(17)(18)を再録しよう。

- | | |
|-------------------------|--------------------|
| (50) a. 僕はもう諦めるよ。 | (51) a. そんなこと、困るよ。 |
| b. 親が悲しむぞ。 | b. あいつの喋り方はイライラする。 |
| c. そんなことをすると、子供が怖がるでしょ! | c. この喫茶店は落ち着く。 |
| d. 心配するよ、おじいちゃんが。 | d. うーん、その選択は迷うなあ。 |
| e. この味では客が飽きる。 | e. あいつの駄洒落は白ける。 |

当節では、(51)の現象が、ES型心理動詞は活動動詞であるという、本稿の主張の反例とならないばかりか、非常に興味深い事実を浮き彫りにすることを論じたい¹²。

さて、(50)で用いている心理動詞は他動詞であり、(51)のそれは自動詞である。では、自動詞において、なぜ(51)のような現象が起こるのだろうか。(51a-e)を見て気付くのは、いずれの文も、主題「そんなこと」「あいつの喋り方」などの心理的特性を述べる文であることである。(51a)では主題を標示する「ハ」が言語化されていない。)主題の特性は形容詞や「名詞+ダ」などの状態表現で述べるのが通常である。ところが(51)の場合、例えば(52)のように言うことが出来ない

のである¹³。

- (52) a. *そんなこと、困りだ。
b. *あいつの喋り方はイライラだ。
c. *この喫茶店は落ち着きだ。
d. *その選択は迷いだ。
e. *あいつの駄洒落は白けだ。

つまり、(51)の自動詞には、対応する状態表現が欠如しているので、「ル」形でそれを代用していると考えられるのである。もっとも、(51)での述語は心理「動詞」の例ではなく、既に心理「形容詞」化していると言った方が妥当かもしれない。(藤井友比呂氏(個人談)の指摘による。二人の査読者からも同主旨の指摘を受けた。)経験者(EX)を言語化しようとする時、「NPはEXにとって困る」という形を取るのが自然であることは、その傍証になるであろう。(なお、心理形容詞については別稿の用意がある。)

「ル」形が状態表現の代用とされていることは、例外的格付与(ECM)構文で証明することが出来る。よく知られているように、この構文における従属節部分[]¹⁴には、「馬鹿だ」などの状態表現は現れることが出来るが、「勝つ」などの動作表現は生起出来ない。

- (53) a. 僕は[太郎を馬鹿だ]と思った。
b. *僕は[太郎を勝つ]と思った。

そして、(51)の述語はECM構文と馴染む。(筆者には(54)の文は全く問題なく響くが、これを文体的に(?)嫌う話者もいた。が、そのような話者にとっても、(53b)より遥かに容認性が高いことは事実であろう。)

- (54) a. [それを困る]と思うのは、君がやましいからだ。
b. [あいつの洒落を白ける]と感ずるかどうかは、時と場合によるなあ。
c. あなたは[この場所を本当に落ち着く]と思いませんか。

ところで、堀川(1991)は興味深い観察を行っている。本稿で言うES型心理動詞に、「ル」形が可能な(55)のタイプと、不可能な(56)のタイプがあるという観察である。

- (55) a. 二日連続の徹夜は、本当に参ります。
b. 初級クラスの授業は、疲れます。
(56) a. *彼の態度は、がっかりする。
b. *彼の大胆さは、びっくりします。(堀川1991: 191-192)

堀川は、(55)は形容詞用法があるタイプ、(56)はそれがないタイプとしているが、これは、本稿での自動詞・他動詞の別と概ね対応しているのである。

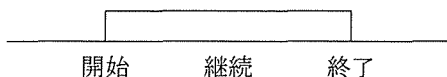
4. アスペクチュアルな特質

4.1. 開始

第2章で、ES型心理動詞が活動動詞の類型に属することを論じた際に、2.2節において、ES型が終了限界を持たないことを論証した。本章では、この動詞類型が、その他のアスペクチュアル

な点においても活動動詞と全同であることを論じる。

アスペクチュアリティ (aspectuality, 動詞に内在化されたアスペクト的意味) には次の三つの局面がある。これを「アスペクチュアリティの三局面」と呼ぼう。



状態を表わす述語は別にして、それ以外の動詞には全て、動作が開始する時点が存する。継続性の動詞は、さらに動作が継続する期間を有するが、そのうちの達成動詞では動作が終了する時点が現れ、活動動詞ではこの時点が現れない。到達動詞のような瞬間性の動詞には、継続期間が基本的に設定し難く、開始すなわち終了である。そして、ES型心理動詞が活動動詞であるなら、開始と継続はあるが終了はない筈である。終了時点については証明済みだが、本章で、別の言語現象によってそのことを補強することにしよう。

「～{分/日}で」などの表現は、「花が三日で枯れた」のような動作の終了に要する時間を表わすものの他に、動作の開始に要する時間を表わすものがあり、これは(57)の心理動詞でも成立する¹⁵。

- (57) a. 僕は会って30秒でナオミに惚れた。
b. 進は問題を見て1分で諦めた。
c. 田中は10分程で講師の話にうんざりした。
d. 僕はここに来たことを10秒で後悔した。

この他にも、「君がピアノに飽きるのに2時間もあれば十分だ」「ブルースを楽しむのに長い時間は必要ありません」などの表現もあり、ES型心理動詞に開始時点が存することは明白である。

また、英語においてしばしば援用される almost のテストがある。

- (58) John almost broke the computer.

達成動詞 break では、almost が、動作の開始時を修飾するか（「もう少しで、壊すような動作をするところだった」）、動作の終了時を修飾するか（「かなり損傷を与えたが、完全に壊すには至らなかった」）で曖昧である。このテストは、日本語では「もう少しで～するところだった」という形で、英語と同様に使用することが出来る。

- (59) a. お涙ちょうだいのお話にもう少しで同情するところだった。
b. もう少しで選択に迷ってしまうところだった。

ここにおいて、「もう少しで～するところだった」が、動作の開始時を修飾する読みはあるが、終了時を修飾する読みがないことは極めて重要である。

4.2. 継続

継続期間の介在は、(60)での「長い間」「一週間の間」といった、期間副詞の生起で確かめることが出来る（吉永1997参照）。期間副詞を許す心理動詞には(61)のようなものがある。

- (60) a. 私は長い間そのことで悩んだ。
b. 私は一週間の間ヨーロッパ旅行を楽しんだ。

- (61) 恨む, 心配する, 迷う, 苦しむ, ためらう, 後悔する, 憧れる, こらえる, 耐える, 愛する, 関心がある, ハラハラする …

ところが, (62) のように期間副詞を許容しない心理動詞があり, このような動詞は (63) でリストする如くかなり多い。

- (62) a. *私は10分程その結果に驚いた。
b. *私は息子の合格に一週間の間喜んだ。

- (63) 怖がる, 恐れる, 呆れる, 飽きる, 悲しむ, 惚れる, 感心する, おびえる, まいる, 白ける, ひるむ, 懲りる, 失望する, 滅入る, 虫酸が走る, ゾツとする …

これらの動詞は, 「怖がっている」「悲しんでいる」など「テイル」形が動作持続的な意味を持つので, 瞬間動詞とは決して言えない筈であるのに, なぜ (62) が非文になるのだろうか。

ここで参考になるのが森山 (1988: 141-144) における「維持」の概念である。森山は動きの持続に次の三タイプを認めているが, 当節での議論にとって重要なのは (64c) のタイプである。

- (64) a. 人が三時間歩く。 「過程」(動きが運動として展開している期間)
b. 三時間時計が止まる。 「結果持続」(動きの結果が持続的である場合)
c. 人が三時間座る。 「維持」(動きの結果の保持が主体的に行われる)

以下, 森山が維持タイプで可能としている言語形式の心理動詞との共起を見るが, 動詞によっては, ある言語形式に対する成立要件を満たさない場合があるので, 全てのテストに合格しないものもある。

(65)-(68) の文例において, (a) で (61) の動詞群を, (b) で (63) の動詞群を見ることにしよう。

- (65) 「～続ける」
a. {悩み/?楽しみ/迷い/心配し} 続ける。
b. *{驚き/喜び/失望し/飽き} 続ける。

- (66) 「～しているところだ」
a. {悩んでいる/楽しんでいる/苦しんでいる/後悔している} ところだ。
b. *{驚いている/喜んでいる/怖がっている/おびえている} ところだ。

- (67) 「～しながら」¹⁶
a. {悩み/楽しみ/むかつき/恨み} ながら
b. *{驚き/喜び/まいり/滅入り} ながら

森山(p.142)は, 「*座り始める」(複数主語の繰り返し動作を除く) が非文であることから, 維持では「～始める」が言えないとしている。しかし, 「実験中のロボットが椅子に座り始めた瞬間, 突然回線が故障した」など, 筆者にはさほど不自然ではないのでテストに含める。

- (68) 「～始める」
a. {悩み/?楽しみ/焦り/ムシャクシャし} 始める。
b. *{驚き/喜び/呆れ/悲しみ} 始める。

以上のことより, (63) の動詞群が維持の特質を見せないことが分かる。心理動詞構文中に現れ

る期間副詞は、心理的動作の「維持期間」を修飾すると考えられ、従って、この過程が介在しない(63)タイプの動詞は期間副詞を許容しないのであろう。とすれば、(62)が言えないのは、心理動詞が継続過程を有さないからではなく、それとは独立した別の要因によるということになる。(62)は本稿の主張に対する反例とはならないのである。

4.3. 終了

最近、Kishimoto(1996)、Tsujiura and Iida(1999)が論じている「～かけの」という表現は、心理動詞が終了限界を持たないことに対して、非常に面白いテスト枠を提供してくれる¹⁷。

- (69) a. 落ちかけの看板/壊れかけのビル 開始読み (inception reading)
b. 奥さんが作りかけのケーキ/ケーキを作りかけの奥さん
継続読み (halfway reading)

- (70) a. *走りかけの子供/*笑いかけの人
b. *子供を叱りかけの親/*親が叱りかけの子供
c. *映画を見かけの学生/*学生が見かけの映画

この表現は、(69a)のような到達動詞では、動作(例えば「落ちる」)がまだ始まっていないが、いずれ開始するであろうことを表わす。また(69b)のような達成動詞では、動作(例えば「作る」)は既に開始しており、やがて終わりが生じることを表わす。そして重要なことは、(70)の活動動詞(すなわち未完了的動詞)では、開始読み・継続読みとも不可能であることである。つまり、このテストは、終了時点を持たない動詞を選び出す手段となり得るのである。

そして、予測されるように、心理動詞ではこの表現が全くの非文を導く。

- (71) a. *お化けに怖がりかけの子供/*子供が怖がりかけのお化け
b. *妻を憎みかけの夫/*夫が憎みかけの妻
c. *映画を楽しみかけのOL/*OLが楽しみかけの映画
d. *孫を心配しかけのおじいちゃん/*おじいちゃんが心配しかけの孫
e. *入試に焦りかけの生徒/*進路に迷いかけの友人
f. *日照りに苦しみかけの農民/*結婚問題に悩みかけの女性

このように、「～かけの」のテストによっても、心理動詞に終了限界がないことが明らかになるのである。

5. 結語

本稿で論じたことは、日本語のES型心理動詞が、Vendler(1967)の動詞四分類中に収まり得る動詞類であるということに尽きる。この結論は平板で刺激に欠けるものと映るかもしれない。しかしながら、心理動詞に関する長い研究史を持つ生成文法においてさえ、EO型の「特異性」に研究者の興味が集中するあまり、ES型については、動詞分類における位置付けさえ十分に論じられていないのが現状である。このような状況は何としても改善したかった。また、本稿では触れる余裕がなかったが、ES型心理動詞が異質な類型ではないことを背景にして、EO型が示す(とさ

れる) 幾つかの「特異性」を再考するという意図も筆者にはある。(EO型が非対格動詞ではないという主張は三原1999に見られる。) このことについては、順次明らかにしてゆきたい。

注

- 1 本稿では、生成文法における伝統に準拠し「心理動詞」(experiencer verbあるいはpsych (ological) verb) という名称を用いるが、日本語学では「感情動詞」(山岡1998)、「内的情態動詞」(工藤1995)などと呼ばれることもある。もっとも、上記の論考においてそれらの名称で括られている動詞類型には、「思う」などの思考動詞や、「見る」などの知覚動詞も含まれるので、本稿よりも広い動詞群を含むということは言えよう。また、山岡(1998)は感情動詞を三分類し、さらにそれらを下位区分しているが、本稿での心理動詞は、山岡の「情意」という下位区分に相当すると思われる。英語においても、心理動詞を幾分か広義に捉える論考にLevin(1993)などがある。
- 2 Akatsuka McCawley(1976)の主論点はAkatsuka(1969)に既に見られる。また、最近になって刊行された包括性を目指す研究については、Bando(1997, 1998)を参照されたい。
- 3 EO型が示すとされる「特異な」言語現象には、本論(2)で見る逆行束縛を初めとして、主題役割階層(Jackendoff 1972)に違反する連結(linking)、島からの要素の抽出などがある。本稿ではこれらに詳しく触れる余裕がないが、例えばNakajima(1993)に要を得た解説があるので、それなどを参照されたい。なお、全ての研究者がEO型を「特異な」動詞類型と見ている訳ではない。この立場を取る論考として、Bouchard(1995)、丸田(1998)、三原(1999)などがある。また、EO型における逆行束縛については、GB理論やミニマリスト理論の観点からの分析、機能的統語論の枠組みによる分析の他、多くの研究があるが、筆者自身も別の視点からの分析を準備中である。
- 4 残る問題は、fearや(心理動詞としての)loveなどが、なぜ進行形を許容しないかである。これは別稿を要する問題だが、恐らくfearなどが、主語の特質を示す個体述語(individual-level predicate)であるからではないかと思われる。(この見解はEndo and Zushi 1993にも見られる。)もしそうだとすると、ES型心理動詞の典型として、これらの動詞を挙げるのは適切ではないということになろう。本論(4)で観察したように、多くのES型は、特質ではなく事象(event)を表わすものである。
- 5 Van Voorst(1992)は、(英語)心理動詞はVendler(1967)分類における到達動詞(achievement verb)であると結論付けており、本稿での結論とは一見相容れないように思えよう。しかしながら、これは到達動詞の規定の違いに起因するものである。典型的な到達動詞とされてきたものは、一般的に言って自動詞用法のbreak/fall/meltなど、すなわち、状態変化が瞬間的に起こる非対格動詞である(影山1996など参照)。が、Van Voorstは、hear/notice/see/smellなどを到達動詞としており、これは、時折「jail型」と呼ばれることもあるタイプである。そして、非対格動詞は自動詞的達成動詞(intransitive accomplishment)として分類されている。

本稿ではこの点に関してより一般的と思われる見解を踏襲したい。つまり、到達動詞とは、(a)瞬間的な状態変化を示し、(b)終了限界を有する動詞ということである。(なお、Vendler分類における到達動詞には、win (the game)やcross (the bridge)などの他動詞も含まれるのだが、個人的には自動詞に限定したいと考えている。)Van Voorstが到達動詞としているものは、状態変化を表わさず、終了限界を示さないという点において、本稿で言う到達動詞の特質を有していない。さらに、次に見るように、これらの動詞は期間副詞(for an hourなど)を許容するという点で、瞬間動詞とは言えないものも多い。

(i) We will see you again for an hour tomorrow.

これらの動詞は活動動詞であるとしておきたい。とすれば、本稿の主張は Van Voorst(1992)の結論とも矛盾しないということになる。

6 「テイル」が示す基本的な持続様式には、「走っている」「(本を) 読んでいる」などの動作持続、「壊れている」「(荷物が) 届いている」などの結果持続の二つがある。この二つの様式が、動作動詞・結果動詞という動詞タイプの差と連動していること(奥田1978)は、ここで繰り返すまでもないであろう。「彼は去年、中国を旅行している」などの効力持続(三原1997, 工藤1995の「パーフェクト」)は、動詞のタイプを選ばないので、本論の議論とは無関係である。

7 数量詞連結構文は、幾つかの要因が絡み合っその可否を決める、複雑な様相を呈する構文であり、そのことに応じて、文法性判断も話者によってかなりの揺れが観察される。(13)の例は、その点に関して非常に興味深い現象を露にしているのであるが、本稿ではこのことに触れる紙幅の余裕がない。三原(1998, 2000)を参照されたい。また、(13)(14)が、共に未完了的動詞を含んでいながら文法性が異なるのは、目的語に対する働きかけの差に起因する。このことについても三原(1998)を参照していただきたい。

8 未完了の逆説は、実際には「逆説」と言う程のものではなく、活動動詞の定義から自動的に導かれるものである。活動動詞の定義に関しては、「成立しさえすれば、どこで中止されても動作が成立したといえる」動詞という工藤(1995: 73)の言明が卓見であると思う。もっとも工藤は、この引用頁では「動作動詞」に言及してそのように言っているのだが、本稿の文脈に翻訳すれば、「活動動詞」の定義と理解してかまわないであろう。

また査読者から、(19)(22)の「歩いた」「恨んだ」などにおける過去時制は、「今はもう歩いていない」「今はもう恨んでいない」ことを含意するので、含意に関する記述が正確ではないという指摘を受けた。これは筆者の記述意図とは異なるが、もし誤解を生じる余地があるとすれば、本文での記述は次のような含意関係を意味するものだと理解されたい。

(i) a. 赤ちゃんが歩いている。(→ 赤ちゃんが歩くという事態が成立シタ)

b. 村田さんは大家を恨んでいる。(→ 大家を恨むという事態が成立シタ)

9 直接受動文の可否のみに基準を絞ることは出来ない。よく知られているように、「(紅葉を) 見る」「(ガスの臭いを) かく」などは、「ヲ」格句を伴うので他動詞であると考えられるが、この「ヲ」格句を主語とする直接受動文は基本的に成立しない。これは他動性(transitivity)の高低に関わる問題である。

10 Hatori (1997) は、英語のEO型心理動詞の中に“path expression”を取るものがあると述べているが、これは、次例のイタリックで示すように、一般的には結果述語と呼ばれるものであり、本稿で言う「経路句」とは異なる。

(i) a. The bear frightened the campers *speechless*.

b. Its unexpectedness just shocks my questioner *into silence*. (Hatori 1997: 21)

11 「喜ぶ」を他動詞とするか自動詞とするかは、辞書によってその記述が異なるようである。須賀(1981=1995, 頁数は再録版による)によれば、自動詞とする辞書に『新明解国語辞典』『角川国語辞典(新版)』『新選国語辞典(新版)』『学研国語大辞典』『旺文社国語辞典(新訂版)』があり、他動詞とする辞書に『岩波国語辞典』があるという(p.136注8)。

12 以下の分析をまとめるにあたって、山岡(1998)は非常に参考になった。山岡は、「ル」形で現在の事態を表わすことが出来る(ia)と、それが不可能な(ib)の区分があることを指摘している。

(i) a. ああ、腹が立つ。

b. *ああ, 怒る。(山岡1998:1-2)

ただ, 山岡は, 「問題の現象は, 一定の条件下で用いられる一つの特異な用法」(p.3) としているが, 規則性がない訳ではなく, 他動詞は概ね (ib) が言えないと思われる。他方, 自動詞の場合は (ia) が言えるものと, 「*ああ, {悩む/苦しむ}」のように言えないものの別がある。もっとも, 「ああ」を加えていることから分かるように, (この現象に関する) 山岡の関心は発話現場における「感情表出」にあるので, 本稿の主論点と完全に重なり合う訳ではない。

なお, 他動詞でも (ii) のようなものは可能と思われるが, 堀川(1991)は非文としており, 話者によって判断が揺れるようである。

(ii) 君の頑張りは感心するなあ。

13 (50) の他動詞には対応する形容詞や「名詞+ダ」があるものが多い。

- | | |
|----------------------|-------------------|
| (i) a. 地震は怖い。(怖がる) | b. 竜巻は恐ろしい。(恐れる) |
| c. 彼の死は惜しい。(惜しむ) | d. 映画は楽しい。(楽しむ) |
| e. 花子は憎い。(憎む) | f. 田中君は感心だ。(感心する) |
| g. ボランティアは僕の喜びだ。(喜ぶ) | |

ただし, 自動詞でも (ii) や (iii) が可能なものもあるので, 完全なパラダイムを構成する訳ではないが。((ii) の事実は山岡政紀氏(私信)の指摘による。ただ, 「痛む」が心理動詞かどうかは検討を要する。)

- | | |
|-----------------------|------------------------|
| (ii) a. 花粉症は苦しい。(苦しむ) | (iii) a. 嫁の来手がないのが悩みだ。 |
| b. ああ, 腹だたい。(腹が立つ) | b. これは驚きだ。 |
| c. それを思うと胸が痛い。(痛む) | c. 私にとってはそれがむしろ苦しみです。 |

14 生成文法では, この構文は従属節を含むものとして分析され, 「太郎を」をその従属節の主語とする。他方, 日本語学では単文として扱うのが通常であろう(益岡1987(第2部第4章)参照)。どちらの立場を取っても本論での分析には影響を及ぼさない。

15 ただ, 査読者が正しく指摘したことだが(文例は三原による), (ia) のように「ようになる」などを付け加えないと非文になるものや, (ib) のように, これを付加してさえ不自然なものもある。

- (i) a. 結婚してわずか2日で夫を {恨むようになった/*恨んだ}。
b. 講演を聞いて10分で話の内容に {*驚くようになった/?驚いた}。

これは一見, 次節で述べる「維持」の概念や, 査読者の示唆による「自己統御性」によって説明されるように思えるかもしれないが, これらの概念と矛盾しない (ii) においても, 開始読みで非文になるという現象が起こる。

- (ii) a. *水着に着替えて(ただちに)3分で泳いだ。
b. *図書館に行って(すぐ)30秒で雑誌を読んだ。

従って, (i) が提示する問題は, 本稿の主張を直ちに無にするものではなく, 恐らく, 動作が開始する瞬間のみを捉えて動作が成立したと言える活動動詞と, 開始+(多少の)継続があって初めて動作の成立を云々出来る活動動詞の峻別に関わる問題であると思われる。が, この問題を論じることは本稿の射程を超えるので, 今はここでとどめておきたい。

16 森山は, 実際にはこれをテストとして用いておらず, 「~しながら」「~したまま」の交替について述べているのだが, テストとして有効であると思われるのでここに含める。また, 「ひるみながらも」「戸惑いながらも」のように, 「モ」を付けると言えるようになるものは多いが, この場合, 明らかに文型が異なるので反例とはならないであろう。

17 Tsujimura and Iida(1999)は, Kishimoto(1996)に対する反論として書かれたものなのだが, 筆

者の見るところ、「～かけの」が成立するのは完了的動詞（あるいは完了的表現）の場合のみであるという、前者の結論の方が妥当であると思われる（詳しくは前掲論文参照）。ただ、前者の論考には筆者とは甚だしく文法性判断が異なる文例が多く含まれており、その結論に至る道程では賛成出来ない点も多々ある。また、本論の(70a)において「*走りかけの子供」「*笑いかけの人」を非文としたが、「走りかけの姿勢」「笑いかけの顔」などは完全に文法的であり(加藤敏三氏(個人談)の指摘による)、「動詞」だけでは規定し切れない側面もある。最終的には、「結果の含意」(三原1998)のような捉え方が要求されると思うが、この問題は別稿に譲りたい。

参考文献

- Akatsuka, Noriko (1969) *NP Movement in Japanese*. MA Thesis. University of Illinois.
- Akatsuka McCawley, Noriko (1976) Reflexivization: a transformational approach. M. Shibatani (ed.) *Syntax and Semantics 5: Japanese Generative Grammar*. 51-116. Academic Press.
- Bando, Michiko (1997) The lexical properties of Japanese psych-verbs and -ni NPs. *KLS* 17. 154-164.
- Bando, Michiko (1998) *Semantic Structures of Psychological Predicates*. PhD Dissertation. Osaka University.
- Belletti, Adriana and Luigi Rizzi (1988) Psych-verbs and θ -theory. *Natural Language & Linguistic Theory* 6:3. 291-352.
- Bouchard, Denis (1995) *The Semantics of Syntax*. University of Chicago Press.
- Endo, Yoshio and Mihoko Zushi (1993) Stage/Individual-level psychological predicates. H. Nakajima and Y. Otsu (eds.) *Argument Structure*. 17-34. Kaitakusha.
- Grimshaw, Jane (1990) *Argument Structure*. MIT Press.
- Hatori, Yuriko (1997) On the lexical conceptual structure of psych-verbs. T. Kageyama (ed.) *Verb Semantics and Syntactic Structure*. 15-44. Kurosio Publishers.
- 堀川 智也 (1991) 「心理動詞のアスペクト」『北海道大学言語文化部紀要』第21号, 187-202.
- Jackendoff, Ray (1972) *Semantic Interpretation in Generative Grammar*. MIT Press.
- 影山 太郎 (1996) 『動詞意味論』くろしお出版.
- Kishimoto, Hideki (1996) Split intransitivity in Japanese and the unaccusative hypothesis. *Language* 72:2.248-286.
- 工藤 真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト』ひつじ書房.
- Lakoff, George (1970) *Irregularity in Syntax*. Holt, Rinehart and Winston.
- Levin, Beth (1993) *English Verb Classes and Alternations*. University of Chicago Press.
- 丸田 忠雄 (1998) 『使役動詞のアナトミー』松柏社.
- 益岡 隆志 (1987) 『命題の文法』くろしお出版.
- 益岡 隆志 (1991) 『モダリティの文法』くろしお出版.
- 三上 章 (1953) 『現代語法序説』刀江書院 [くろしお出版から1972年に復刻].
- 三原 健一 (1997) 「動詞のアスペクト構造」, 中右実 (編) 日英語比較選書7『ヴォイスとアスペクト』, 107-186, 研究社出版.
- 三原 健一 (1998) 「数量詞連結構文と「結果」の含意」『月刊言語』6月号～8月号, 【上】86-95, 【中】94-102, 【下】104-113.

- 三原 健一 (1999) 「日本語心理動詞の非非対格性」『日本語・日本文化研究』第9号, 45-59, 大阪外国語大学日本語講座。
- 三原 健一 (2000) 「連結数量詞と事象計算機能」, 国立国語研究所報告『日本語とスペイン語 (3)』, 95-122, くろしお出版。
- 森山 卓郎 (1988) 『日本語動詞述語文の研究』明治書院。
- Nakajima, Heizo (1993) Introduction to part I. H. Nakajima and Y. Otsu (eds.) *Argument Structure*. 1-9. Kaitakusha.
- 野村 剛史 (1982) 「自動・他動・受身動詞について」『日本語・日本文化』11, 大阪外国語大学留学生別科 [須賀一好・早津恵美子 (編) 『動詞の自他』(1995), 137-150, ひつじ書房に再録]。
- 奥田 靖雄 (1978) 「アスペクトの研究をめぐって」『教育国語』53号~54号, 【上】33-44, 【下】14-27. Postal. Paul (1971) *Cross-Over Phenomena*. Holt, Rinehart and Winston.
- 須賀 一好 (1981) 「自他違い: 自動詞と目的語, そして自他の分類」『馬淵和夫博士退官記念国語学論集』大修館書店 [須賀一好・早津恵美子 (編) 『動詞の自他』(1995), 122-136, ひつじ書房に再録]。
- 杉本 武 (1986) 「格助詞」, 奥津敬一郎・沼田善子・杉本武『いわゆる日本語助詞の研究』第3章, 227-380, 凡人社。
- 杉本 武 (1991) 「ニ格をとる自動詞: 準他動詞と受動詞」, 仁田義雄 (編) 『日本語のヴォイスと他動性』, 233-250, くろしお出版。
- Tsujimura, Natsuko and Masayo Iida (1999) Deverbal nominals and telicity in Japanese. *Journal of East Asian Linguistics* 8:2. 107-130.
- Van Voorst, Jan (1992) The aspectual semantics of psychological verbs. *Linguistics and Philosophy* 15:1. 65-92.
- Vendler, Zeno (1967) *Linguistics in Philosophy*. Cornell University Press.
- 山岡 政紀 (1998) 「感情表出動詞文の分類と語彙」『日本語日本文学』第8号, 1-17, 創価大学。
- 吉永 尚 (1997) 「心理動詞の意味規定とその特性について」『日本語・日本文化研究』第7号, 81-98, 大阪外国語大学日本語講座。

付 記

本稿は、大阪外国語大学、信州大学、東北大学、広島大学、大阪大学におけるセミナー、日本語文法談話会 (1999年12月、於一橋大学) において口頭で述べた内容を、大幅に加筆修正したものである。有意義なコメントをいただいた、岩崎卓、加藤鉦三、菊地康人、堤良一、野田尚史、花齒悟、平岩健、藤井友比呂、丸田忠雄、森山卓郎、山岡政紀の諸氏、及びお二人の査読者には特に感謝申し上げます。

(投稿受理日: 2000年3月15日)

三原 健一 (みはら けんいち)

大阪外国語大学外国語学部日本語講座 562-8558 大阪府箕面市粟生間谷東 8-1-1

E-mail: kmihara@post 01.osaka-gaidai.ac.jp

On the proper treatment of experiencer verbs in Japanese

MIHARA Ken-ichi

Osaka University of Foreign Studies

Keywords

ES type verb, activity verb, intransitive and transitive verb, aspectuality

Abstract

In this article I investigate the position of Japanese experiencer verbs in the paradigm of verbal classes. In particular, I focus on ES (experiencer-subject) type experiencer verbs as given in (a), as opposed to EO (experiencer-object) type experiencer verbs as given in (b).

(a) John *ga* kaminari *o* kowagaru.
 NOM *thunder* *ACC* *fears* ‘John fears thunder’

(b) Kaminari *ga* John *o* kowagaraseru.
 thunder *NOM* *ACC* *frightens* ‘Thunder frightens John’

I demonstrate that ES type experiencer verbs are activity verbs in the sense of Vendler (1967), and have a complete set of intransitive/transitive verbs.

In section two I explicate that ES experiencer verbs are activity verbs using several well-attested diagnoses. 1) ES verbs exhibit atelic eventuality in contrast to achievement/accomplishment verbs. 2) The present (*-ru*) form of ES verbs signifies future time in contrast to state verbs. 3) The progressive (*-te iru*) form implies a telic event, in contrast to accomplishment verbs. These findings all coincide with properties of activity verbs.

In section three I classify ES type experiencer verbs into intransitive and transitive verbs based on three criteria. 1) ES verbs marked with the accusative case marker *-o* are identified as transitives. 2) ES verbs used with the dative case marker *-ni* are transitives if a direct passive is available, and intransitives otherwise. 3) ES verbs are transitives if long distance scrambling shows weak unacceptability, and intransitives if this operation induces strong unacceptability. Then I argue that 1) interpretive differences between *-ni* and *-de* marked cause phrases and 2) the present eventuality observed for some ES verbs can be explained in terms of this intransitive/transitive distinction.

In section four I show that linguistic evidence from aspectuality also suggests that ES type experiencer verbs are similar to activity verbs. Like activity verbs, ES type verbs are compatible with the inception reading but not with the termination reading of an event. However, while some ES verbs, like activity verbs, can occur with durational adverbs, others, quite unexpectedly, do not. I conclude that this dilemma can be solved by applying the idea of ‘maintenance’ (Moriyama 1988).